日本中國學會報　第六十九集
二〇一七年十月七日　發行　抜刷

陶淵明の讀書の軌跡

――「集聖賢群輔錄」を中心として――

宇賀神秀一

陶淵明の讀書の軌跡

――「集聖賢群輔錄」を中心として――

宇賀神秀一

はじめに

本稿は、東晉から劉宋初期を生きた詩人、陶淵明の別集卷九から卷十にかけて收錄される「集聖賢群輔錄」、一名「四八目」を研究對象とするものである。[1] その出所については北齊の陽休之が「陶潛集序錄」において、次のように述べている。

其集先有兩本行於世。一本八卷無序。一本六卷幷序目、編比顚亂、兼復闕少。蕭統所撰八卷、合序目傳誄、而少「五孝傳」及「四八目」。然編錄有體、次第可尋。余頗賞潛文、以爲三本不同、恐終致忘失、今錄統所闕、幷序目等、合爲一秩十卷（其の集は先に兩本の世に行わるる有り。一本は八卷にして序無し。一本は六卷にして序目を幷するも、編比顚亂して、兼ねて復た闕少あり。蕭統の撰する所の八卷は、序目傳誄を合するも、而も「五孝傳」及び「四八目」を少（か）く。然れども編錄に體有り、次第尋ぬべし。余 頗る潛文を賞し、以爲らく三本同じからざれば、恐らくは終に忘失を致さんと。今 統の闕く所を錄し、序目等を幷して、合して一秩十卷と爲す）。

これによると陽休之は、はじめに通行していた陶集の八卷本と六卷本、及び「五孝傳」と「四八目」を缺く蕭統本を參照しながら、十卷本を編纂したことが知られる。從って、「五孝傳」と「四八目」は、蕭統本以前に通行していた陶集に收められていたことになり、梁啓超が八卷本の構成を、集五卷・「五孝傳」一卷・「四八目」二卷と推定して以來、八卷本に收錄されていたと捉えるのが定說となっている。[2]

その後、「四八目」は「集聖賢群輔錄」（以下、「群輔錄」と略稱）と稱されるようになり、[3] 宋・汲古閣本『陶淵明集』、元・李公煥『箋注陶淵明集』、明・何孟春『陶靖節集』などに收錄されてきた。清朝に至って『四庫全書總目提要』から僞作の誹りを受けたものの、近年、僞作說は支持されていないというのが大勢である。[4] もとより「群輔錄」及び「五孝傳」は、初期の陶集以來、淵明の作として連綿と受け繼がれてきたことからすれば、「群輔錄」の存在は陶淵明研究において等閑に附すべきでない。それにも關わらず、從來、あまり注目されていないのは、僞作說の影響が多分に考えられようが、そもそも「群輔錄」それ自體を如何なる作として捉えるべきかが、よく分からない點にも要因があるだろう。そこで、本稿はまず「群輔錄」に關わる先學の見解を通覽しながら、その基本的な性質を捉え直し、「群輔錄」

を通じて検討されるべき點を見定めることから始める。

一

「群輔錄」は『四庫全書總目提要』において子部・類書存目に收められており、また同書の子部・類書の王應麟『小學紺珠』十卷についての提要には、「群輔錄」に關わる次のような言及がみられる。(5)

宋王應麟撰。分門隸事、與諸類書略同。而每門之中、以數爲綱、以所統之目繫於下、則與諸類書迥異。蓋仿世傳陶潛「四八目」之例。以數目分隸故實、遂爲類事者、別**㨰**一格也（宋の王應麟撰。門を分けて事を隸（したが）えるは、諸（もろもろ）の類書と略（ほぼ）同じきなり。而して每門の中、數を以て綱と爲し、統ぶる所の目を以て下に繫くるは、則ち諸の類書と迥（はる）かに異なれり。蓋し世傳の陶潛の「四八目」の例に仿うなり。數目を以て故實を分隸し、遂に類事を爲すは、別に一格を**㨰**（はじ）むるなり）。

王應麟の『小學紺珠』が門類を分けて事柄を竝べているのは、一般的な類書と概ね同じであるが、各門類に「數」の綱目が掲げられているのは、一般的な類書と大きく異なっていると述べ、それは、おそらく淵明の「四八目」の體例に倣ったものだろうと說いている。「群輔錄」のこの特徵的なスタイルを示すべく、その冒頭の例を擧げよう。なお、士人の姓名から故實を引用する「右」以下の記述までを一條と看做して、全六十九條每に通しで番號を振った。

①明由曉升級［注：宋均曰、級、等差。政所先後也。］必育受稅役［注：宋均曰、受賦稅及徭役、所宜施爲也］成博受古諸［注：宋均曰、古諸侯職等也。］隕丘［注：一作立］受延嬉［注：宋均曰、延、長。嬉、興也。主受此錄也。］

右燧人四佐。燧人出天、四佐出洛［注：宋均曰、出天、天所生。出洛、地所生也。］。

②……

右伏羲六佐。六佐出世［注：宋均曰、宓戲不及燧人、故增二佐。出世、人所生也。］。

③……

右黃帝七輔。〔九〕州選擧、翼佐帝德。自燧人四佐至七輔、見『論語摘輔象』(6)。

①では「明由」「必育」「成博」「隕丘」ら四人を擧げて、「燧人四佐」と纏められており、これが四庫提要のいわゆる「數」の綱目なのであろう。②「伏羲六佐」、③「黃帝七輔」なども同樣である。また③の末尾に「見『論語摘輔象』」とあるように、①②③の記述はいずれも、三國魏の宋均注『論語摘輔象』に基づくものであることが示されている。(7)

「群輔錄」は、この三條のような記述が全六十九條にわたって竝び、最後の三條の⑰「晉中朝八達」、⑱「河東八裴、琅邪八王」、⑲「太原王、京兆杜、各稱五世」のみ、「故老」の傳聞に據るのを除けば、引用の出典が明示されており、その數は都合四十種の多きに及ぶ。そこに、淸・馬國翰の輯佚などを補い得る佚文が多數含まれている點は留意すべきであろう。なお、注に引用される書物・人物なども概ね劉宋以前のものと判斷し得ることから、潘重規氏が淵明の自注と捉える立場に本稿も從うこととする。(8)

さて、淵明の「群輔錄」編纂の動機が示唆的に窺えるのが、⑲に附された跋文である。次に擧げよう。

凡書籍所載及故老所傳、善惡聞於世者、蓋盡於此矣。漢稱「田叔・孟舒等十人」及田橫「兩客」、魯「八儒」、史竝失其名。夫操

行之難、而姓名翳然、所以撫卷長慨、不能已已者也（凡そ書籍に載る所及び故老の傳うる所、善惡の世に聞こゆる者は、蓋し此に盡けり。漢に「田叔・孟舒等の十人」及び田横の「兩客」、魯の「八儒」を稱するも、史竝びに其の名を失す。夫れ操行の難ありて、而して姓名翳然たるは、卷を撫して長慨し、已已む能わざる所以の者なり）。

書籍や故老の傳承する「善惡」の著名人達は、この書に記し盡くしたであろうと述べる。また漢代に稱えられながらも、史書に名の傳わらない「田叔・孟舒等十人」は、『漢書』高帝紀に次のようにみられる。

貫高等謀逆發覺、逮捕高等、幷捕趙王敖下獄。詔敢有隨王、罪三族。郎中田叔・孟舒等十人自髡鉗爲王家奴、從王就獄（貫高等の謀逆發覺して、高等を逮捕し、幷びに趙王敖を捕えて獄に下す。詔して敢えて王に隨うもの有らば、三族を罪す、と。郎中の田叔・孟舒等十人、自ら髡鉗して王家の奴と爲り、王に從いて獄に就く）。

謀反の疑惑により投獄された趙王・張敖を救うため、「田叔・孟舒等十人」は張敖の私的な奴僕を裝って隨行したと記されているが、田叔と孟舒以外の八人の名は、現行の『漢書』や『史記』の諸注を參照するなどしても不明である。同様に「兩客」についても『漢書』田儋傳に、田横の葬儀を終えた後、主君の死に殉じて、「既葬、二客穿其冢旁、皆自剄從之（既に葬り、二客 其の冢の旁を穿ちて、皆自ら剄して之に從う）」とみられるが、その具體的な名は不明である。淵明は、このほか儒家の八派を開いた魯の「八儒」などの名が史書で失われてしまったことを述べ[9]、彼らの「操行之難」、すなわち品行方正の難點を指摘している[10]。これは、おそらく彼らの熾烈過ぎた氣性などを指してのことであり、そうした彼らの姓名が隱れてしまったのは、とても殘念なことだと慨歎している[11]。從って、「群輔錄」は歴史上において數で呼ばれた士人達を蒐集し、彼らの姓名を記し留めておくためのものであるが、淵明に「群輔錄」を纏めさせた根本的な動機は、よく分からない[12]。その點について清・方宗誠は次のように述べている。

予謂此或淵明偶以書籍所載、故老所傳、集錄之以示諸子、識故實、廣見聞、非著述也（予謂らく此れ或いは淵明偶たま書籍に載る所、故老の傳うる所を以て、之を集錄して以て諸子に示し、故實を識り、見聞を廣げしめんとするものにして、著述に非ざるなり）。

このように、「群輔錄」は子供達に故實を學ばせ、彼らの見聞を廣げるのを目的としているのであって、「著述」ではないと述べる。この方宗誠の見解は、大いに首肯し得るところであり、その點は後述することとしたい。また既に①②③の例にもみたように、「群輔錄」はおよそ引用文で構成されており、その意味においても方宗誠が述べるように、「著述」とは捉え難いのであろう。

ただ、跋文に述べられていたように、淵明にとっての「群輔錄」を纏めるという營みは、古人の姓名が明瞭ならざることに對する慨歎を契機としている側面もある。そうであれば、ただに子供達のためだけに編纂されたものと斷ずることは出來ない。淵明自身の問題關心として、淵明が古人を記し留め、彼らの事跡を傳承しようとした必然的意味を捉え直していく必要もあるであろう。また近年、潘重規氏は「群輔錄」に詳細な注釋を附した上で、「讀書札錄之一斑也（讀書札錄の一斑なり）[13]」と述べ、「群輔錄」を淵明の讀書札記と捉えている。確かに「群輔錄」を通じて、淵明の讀書の跡を辿ることが出來る。だが、潘氏は淵明詩文から窺える淵明の日々の讀書態度については充分に言及しておらず、さらに「群輔錄」に考證を加えていくことで、より具體

的に淵明の讀書の軌跡とその記述の仕方の有り様を明らかにし得るものとも思われる。

以上、「群輔錄」に關わる先學の見解、及びそれを承けて檢討すべき點を確認した。それでは、そもそも淵明にとっての讀書とは、如何なる營みであったのであろうか。次章では、その點について淵明詩文に即して整理しておくことにしたい。

二

淵明は、讀書に對して如何なる思いを抱き、如何に表現しているのか。まずは「辛丑歲七月赴假還江陵夜行塗口（辛丑の歲七月 赴假して江陵に還らんとして夜に塗口を行く）」（『陶淵明集』卷三）を擧げよう。

閑居三十載　閑居すること三十載
02遂與塵事冥　遂に塵事と冥し
　詩書敦宿好　詩書 宿好を敦くして
04林園無俗情　林園 俗情無し
　如何捨此去　如何なれば此れを捨てて去り
06遙遙至南荊　遙遙として南荊に至る
　叩枻新秋月　枻を新秋の月に叩し
08臨流別友生　流れに臨んで友生と別る　（全二十句）

三十年にわたってわび住まいを營み、世俗のことから遙かに遠ざかっていた。その生活を營む「林園」は、一切の俗調が排されており、そこでは「詩書」、すなわち『詩經』と『書經』、廣くいえば儒家の經典類に慣れ親しんでいたとうたっている。第五句以下、そうした生活を捨て去るのに疑問を感じていることが表明されているが、結局、その疑問を解消し得ないままに、一路「南荊」を目指す。また淵明は「歸去來兮辭（歸去來の辭）」（卷五）において政界と自分が相容れぬことの自覺、加えて、歸鄉後の生活を次のようにうたっている。

歸去來兮　歸りなんいざ
請息交以絕游　請う 交わりを息めて以て游を絕たん
世與我而相遺　世と我と相い遺つ
復駕言兮焉求　復た駕して言に焉をか求めん
悅親戚之情話　親戚の情話を悅しみ
樂琴書以消憂　琴書を樂しみて以て憂いを消す
農人告余以春及　農人 余に告ぐるに春の及べるを以てす
將有事於西疇　將に西疇に事有らんとす

淵明にとって、政界で受けた憂苦を解消しているのが「親戚」との歡談、そして、「琴書」であった。「琴書」を樂しむこと自體は傳統的な士人像に收まるものであるが[14]、淵明は「勸農（農を勸む）」（卷一）で次のようにもうたっている。

孔耽道德　孔は道德に耽りて
42樊須是鄙　樊須 是れ鄙しとす
　董樂琴書　董は琴書を樂しみて
44田園弗履　田園を履まず　（全四十八句）

淵明は、『史記』儒林列傳の「下帷講誦、……。蓋三年董仲舒不觀於舍園、其精如此（帷を下して講誦す、……。蓋し三年 董仲舒は舍園を觀ず、其の精なること此くの如し）」を踏まえながら、董仲舒の學業に對する精勵振りを賞贊する『史記』とは相違して、彼が「琴書」ばかりに耽って、勞働を輕視したのを、孔子と併せて非難している[15]。

淵明は「琴書」を樂しむばかりの傳統的な士人を必ずしも志向してはいない。「讀山海經（山海經を讀む）」其一（卷四）では次のようにみ

られる。

既耕亦已種　既に耕し亦た已に種え
06時還讀我書　時に還た我が書を讀む
窮巷隔深轍　窮巷 深轍を隔つるも
08頗迴故人車　頗る故人の車を迴らさしむ　（全十六句）

畑を耕し種を植え、時に讀書を樂しむことをうたっている通り、勞働の重要性を知る淵明にとって、「琴書」ばかりを弄んでいた董仲舒などは、ともすれば批判の對象にもなったのであろう。さらに「五柳先生傳」（卷六）を擧げよう。

先生不知何許人也。亦不詳其姓字。……。閑靖少言、不慕榮利。好讀書、不求甚解。每有會意、便欣然忘食（先生 何許の人なるかを知らざるなり。亦た其の姓字を詳らかにせず。……。閑靖にして言少なく、榮利を慕わず。書を讀むを好みて、甚だしくは解するを求めず。毎しば意に會する有れば、便ち欣然として食を忘る）。

「五柳先生」の好む「讀書」の態度は、おおらかな理解を求める「不求甚解」であり、これは淵明の生きた當時の些末な訓詁の風潮を非難するものとして理解され[16]、さらに川合康三氏は次のように說明している[17]。

自分に引きつけて本を讀み、自分が樂しければそれでいいという讀書の態度、それは上の「榮利を慕わず」に續くもので、本を讀むことが學問を身につけ、世間での名聲、利益を得ようといった、讀書以外のものを目的とするものではないことを語っている。

こうした五柳先生の「讀書」は、あるいは淵明自身が政界では生き得ぬことを自覺し、學ぶことの目的性を拒絕することで獲得された、純然たる快樂と捉えることが出來る。

さて、このように淵明は「五柳先生傳」に託して、「讀書」をおおらかに樂しむことを述べているが、しかしその一方で、仲閒と文章の疑問を解き明かす、いわゆる讀書談義もまた好んでいた。「移居（居を移す）」其一（卷二）を擧げよう。

鄰曲時時來　鄰曲 時時に來たり
10抗言談在昔　抗言 在昔を談ず
奇文共欣賞　奇文 共に欣賞し
12疑義相與析　疑義 相い與に析く　（全十二句）

淵明は素朴な人達が住む南村に移り住み、彼らと一緒に奇拔で見事な文章を歡びながら鑑賞し、「疑義」ある箇所を分析し合っている。「詠貧士（貧士を詠ず）」其二（卷四）を擧げよう。

傾壺絕餘瀝　壺を傾くるも餘瀝絕え
06闚竈不見煙　竈を闚うも煙を見ず
詩書塞座外　詩書 座外を塞ぎ
08日昃不遑研　日昃くも遑あらずして研す
閑居非陳厄　閑居 陳厄に非ざるも
10竊有慍見言　竊かに慍りの言に見るる有り
何以慰吾懷　何を以て吾が懷いを慰めん
12賴古多此賢　賴いにも古に此の賢多し　（全十二句）

酒はおろか食料すら事缺く貧しい暮らしを營む中にあって、「詩書」などの書物が身邊に溢れ、その研鑽に餘念が無い。また、「癸卯歲十二月中作與從弟敬遠（癸卯の歲 十二月中の作 從弟敬遠に與う）」（卷三）では、從弟の敬遠とともに俗世と隔たった場所で隱棲生活を營むなかで、次のようにうたっている。

歷覽千載書　歷覽す 千載の書

14時時見遺烈　時時に遺烈を見る
　高操非所攀　高操　攀(よ)ずる所に非ざるも
16謬得固窮節　謬って固窮節を得たり
　平津苟不由　平津　苟しくも由らず
18栖遲詎爲拙　栖遲　詎(なん)ぞ拙と爲さん
　寄意一言外　意を寄す　一言の外
20茲契誰能別　茲の契り　誰か能く別(わか)たん　（全二十句）

「千載」に繼承された書物を次から次へと眺めやり、そのはしばしに古人の遺業をみていく。そして、自分は彼らの「高操」には比肩し得ないものの、はずかしながら彼らを通じて我が「固窮節」を體得したとうたっている。さらに「感士不遇賦（士の不遇に感ずる賦）」（卷五）を擧げよう。

　奉上天之成命　上天の成命を奉じ
　師聖人之遺書　聖人の遺書を師とす
　發忠孝於君親　忠孝を君親に發し
　生信義於鄉閭　信義を鄉閭に生ず

天帝の定めた運命に從い、聖人の殘した書物を「師」として仰ぎ、君親に「忠孝」を盡くして、鄉里で「信義」を獲得することを願っている。

以上を要するに、淵明にとっての讀書は、彼の生それ自體の支えとして、また隱棲者として生きる上での指標を追求していくものであった。ここに、淵明の飽くなき學問への欲求が窺えると同時に、彼が古人に對して限りない尊崇の念を抱いていたことが分かる。それでは次章において、「群輔錄」を通じて淵明の讀書の對象となる書物、及び彼の讀書と記述の具體的有り樣を辿っていくこととしよう。

三

淵明が讀み、學んでいた書物は、「群輔錄」において「見『(書名)』」や「『(書名)』・(人名) 曰・稱」などの形で明示されており、示される書物・人物を便宜的に四部分類に卽して整理すれば、次の通りである。[18] なお、注釋者の引用がみられる場合は（ ）內に示し、選者や書名で確證を得ない場合は｛ ｝內に示す。

經部：『毛詩』㉓、『尙書』⑤（孔安國・鄭玄）⑩⑭、鄭玄『尙書大傳』⑥（鄭玄）⑯⑰、『春秋左氏傳』④⑨㉒㉓㉔㉕㉖、『論語』⑫⑮⑱（鄭玄・賈逵）⑳㉕㉗（包咸）㉘、『論語摘輔象』①（宋均）②（宋均）③（宋均）、『孔叢子』㉙

史部：劉向『戰國策』⑪、司馬遷『史記』⑲㉖㉛㉜、班固『漢書』㉖㉝㉞㉟㊳㊴、趙岐『三輔決錄』㊹㊾㊸、｛韋彪｝『京兆舊事』㊻、『三君八俊錄』㊺、『北海耆舊傳』㊶、『濟北英賢傳』㊷、嵇康『高士傳』㊵㊶、周斐『汝南先賢傳』㊱、張璠『漢紀』㊺㊿、｛謝承｝『後漢書』⑭㊵㊷㊸㊹[19]㊸㊹㊺㊶、王沈『魏書』㊺、皇甫謐『高士傳』㉞『逸士傳』⑪、司馬彪『續漢書』㊼㊽㊾58、張勃『吳錄』㊻、｛王隱・虞預・朱鳳｝『晉書』㊺、｛陸機・干寶・曹嘉之・鄧粲｝『晉紀』㊹、孔衍『春秋後語』㉛、『荀氏譜』㊿、『周氏譜』㊱、『崔氏譜』㉞、江敞『陳留志』㉞、袁宏｛『竹林名士傳』｝㊺、戴逵｛『竹林七賢論』『竹林七賢傳』｝㊺、孫統「讚」㊺

子部：『尸子』⑪㉑㉚

集部：『楚辭』⑬、張衡「東京賦」㊷、邯鄲淳「紀碑」㊻、孔融⑯、王粲「於童賦」㊻、曹丕「令」㊼、曹叡「甄表狀」㊻㊼㊶、

吳質「答東阿王書」㉔、杜預『女戒』㊿『善文』㊸㊾、張載「登成都白菟樓詩」㊴、左思㊳、王敦㊼、董京「董威贊詩」㉗、劉琨「重贈盧諶詩」㉒

さて、一見して明らかなように、史部に屬する書物が壓倒的に多い。もとより「群輔錄」は、數で纏められた士人達を蒐集していくものであるから當然といえば當然であるが、改めて實感されるのは淵明の史書への關心の高さだろう。また「群輔錄」には佚書も多くみることが出來、たとえば、經部の『論語摘輔象』は、宋・王應麟が『玉海』の執筆材料に用いており、明・孫瑴『古微書』、清・趙在翰『七緯』などが佚書復元の材料として利用してきた。だが、近年では僞作の誹りを受けたこともあってか、充分に利用されているとはいい難い。ここでは、「群輔錄」を通じて淵明の讀書態度と記述姿勢に檢討を加え、併せて「群輔錄」の資料的價値の一端についても見直していく。まずは『春秋左氏傳』に依據する例を擧げよう。

⑦讙兜 共工 鯀 三苗
右四凶。

⑧蒼舒 隤敳 檮戭 大臨 尨降 庭堅 仲容 叔達
右高陽氏才子八人。齊聖廣淵、明允篤誠。天下之民、謂之八凱。

⑨伯奮 仲堪 叔獻 季仲 伯虎 仲熊 叔豹 季貍
右高辛氏才子八人。忠肅恭懿、宣慈惠和、天下之民、謂之八元。

從四凶至此、悉見『左傳』季文子辭。

續けて、『左傳』[8]文公十八年の記述を擧げる。

昔高陽氏有才子八人。蒼舒・隤敳・檮戭・大臨・尨降・庭堅・仲容・叔達、齊聖廣淵、明允篤誠。天下之民、謂之八愷。[9]高辛氏有才子八人。伯奮・仲堪・叔獻・季仲・伯虎・仲熊・叔豹・季貍、忠肅共懿、宣慈惠和。天下之民、謂之八元。……。舜臣堯、賓于四門、流四凶族[7]、渾敦・窮奇・檮杌・饕餮、投諸四裔、以禦螭魅。是以堯崩而天下如一、……、去四凶也。故『虞書』數舜之功曰、愼徽五典、五典克從、無違教也。

先に⑧を確認しておけば、『左傳』の「蒼舒」「隤敳」らの人名を拔き出し、「右」以下において「高陽氏有才子八人」の「有」字を省略しながら、「齊聖廣淵……」を含めて四つの語句を引いており、⑨もまた同樣である。ここには、淵明の丁寧な記述姿勢がみて取れる。ただし、⑦の「四凶」の「讙兜」「共工」「鯀」「三苗」については、『左傳』において「渾敦」「窮奇」「檮杌」「饕餮」とある點で大きく異なっている。これは、おそらくは『書經』の記述に從ったのであろう。『左傳』に「虞書」とあるのは『書經』舜典を指し、そこに「流共工于幽洲、放驩兜于崇山、竄三苗于三危、殛鯀于羽山。四罪而天下咸服」とあるように、⑦と同樣に「共工」「驩兜」「三苗」「鯀」が擧がっていることがそれを示す。[20]

淵明は⑦の記述の底本として『左傳』を明示しつつも、その姓名については、必ずしも一書のみを用いて記してはいない。これは次の例においても顯著に窺える。

⑪雄陶 方回 續牙 伯陽 東不訾［注：或云不識］秦不虛［注：或云不空］靈甫
右舜七友。竝爲歷山雷澤之游。『戰國策』顏斶云、「堯有九佐、舜有七友。」而『尸子』只載雄陶等六人不載靈甫。皇甫士安作『逸士傳』云、「視其友、則雄陶・方回・續牙・伯陽・東不訾・秦不空・靈甫之徒、是爲七子。」與『戰國策』相應（右舜の七友。竝びに歷山雷澤の游を爲す。『戰國策』顏斶に云う、「堯に九佐有り、舜に

七友有り」と。而るに『尸子』は只だ雄陶等六人を載せて靈甫を載せず。皇甫士安『逸士傳』を作りて云う、「其の友を視れば、則ち雄陶・方回・續牙・伯陽・東不訾・秦不空・靈甫の徒、是れ七子と爲す」と。『戰國策』と相い應ず）。

『戰國策』の顏**觸**の發言は、齊策四にそのままみられるが、ここに舜の「七友」の姓名は記されていない。また皇甫謐『逸士傳』から「七友」の姓名を引用するが、「秦不空」は本文の「秦不虛」と相違して、注の「或云不空」と一致している。さらにまた「『尸子』只載雄陶等六人不載靈甫」については、『太平御覽』卷八一・皇王部六の「帝舜有虞氏」に次のようにみられる。

『尸子』曰、……、舜事親養兄爲天下法、其游也得六人、曰雒陶・方回・續牙・伯陽・東不識・秦不空、皆一國之賢者也。

ここでは、淵明が述べるように「六人」とあり、「靈甫」は載らない。また⑪の注の「或云不識」「或云不空」と同様に作っている。一方で『漢書』古今人表の「上下智人」には、「雒陶」「續身」「柏陽」「東不訾」「秦不虛」の名が纏まってみられ、[21]ここでは⑪の本文と同様に「秦不虛」に作っている。從って、淵明は⑪を記述するに當たって、『戰國策』や『尸子』、『逸士傳』の三書を用いており、それのみならず『漢書』も參照していたのであろう。ここに、淵明の様々な書物を入念に讀み込む態度、加えて、異說も漏らさずに殘しておこうとする周到な記述姿勢を窺うことが出來るのである。

さて、淵明は引用例の多さからも、とくに班固の『漢書』を熟讀していたようである。ただ留意したいのは、淵明が讀み、學んでいた『漢書』は、現行本の『漢書』と大きく異なっている點である。たとえば、「群輔錄」の㉝において張良・蕭何・韓信を擧げて、「右三傑。漢高祖曰、「此三人、人之傑也。」見『漢書』」と劉邦の發言を引用するのは、既に潘重規氏が指摘するように、現行『漢書』高帝紀の「三者皆人傑」に當たるのであろう。だが、主旨は同じとはいえ、字句は殆ど一致しない。また次のような例もみられる。

㊴平阿侯王譚 成都侯王商 紅陽侯王章 曲陽侯王根 高平侯王逢時

右竝以元后弟同日受封、京師號曰五侯。竝奢豪富侈、招賢下士。谷永・樓護皆爲賓客。時人爲之語曰、「谷子雲之筆札、樓君卿之脣舌。」言出其門也。見『漢書』。張載詩曰、「富侈擬五侯」。

㊴は現行『漢書』游俠傳において、「與谷永俱爲五侯上客、長安號曰、「谷子雲筆札、樓君卿脣舌。」言其見信用也」と類似した一文をみることが出來るが、かなり文字の異同がある。こうした「群輔錄」における『漢書』と現行本の異同は、少なくとも淵明の記述姿勢の杜撰を意味するものではないと考える。それは以下のような理由に據る。

王念孫は『讀書雜志』志四、「漢書雜志」卷十四の「谷子雲筆札、樓君卿脣舌」の條で、「案此本作「谷子雲之筆札、樓君卿之脣舌。」後人刪去兩「之」字、則句法局促不伸（案するに此れ本「谷子雲之筆札、樓君卿之脣舌」に作る。後人兩「之」字を刪去すれば、則ち句法局促にして伸びず）」と推定し、その根據として樣々な文獻を擧げている。そのうちの『藝文類聚』卷三十三に引かれる『漢書』游俠傳の例をみてみよう。

婁護、字君卿……。與谷永俱爲五侯上客、長安號曰、「谷子雲之筆札、婁君卿之脣舌。」

武德七年（六二四）に上表された『藝文類聚』では、「之」字の有無については「群輔錄」の㊴と一致するものの、そのほかは現行の『漢書』と殆ど同樣である。だが、建安五年（二〇〇）に上表された荀悅

『前漢紀』巻二十四の孝成帝皇帝紀では、次のように記されている。

時谷永與齊人樓護俱爲五侯上客。……。時人爲之語曰、「谷子雲之筆札、樓君卿之脣舌。」言其甚見信用也。

ここでは、王念孫の指摘している「之」字の有無のほか、「時人爲之語」についても「群輔錄」と一致している。このことからすれば「群輔錄」には、『漢書』の古い姿、あるいは散逸した漢代の歴史的記錄が殘されている蓋然性が高いものといえる。

以上、一部の例を通じてではあるが、「群輔錄」には淵明が様々な書物を渉獵し、古人の姓名や故實を丁寧に引用していく記述姿勢が窺われた。とりわけ⑪における雄陶ら「舜七友」については、『戰國策』、『尸子』、『逸士傳』、『漢書』の四書を讀み比べた上で、その人數を定め、姓名を判斷していく周到振りである。ここに、從來、主として「五柳先生傳」などで結ばれてきた淵明の讀書のイメージとも異なる態度がみて取れる。また淵明が古人に對して尊崇の念を抱いていたことは既に第二章にみた通りであるが、この「群輔錄」から窺える古人の姓名を正しく、餘すことなく傳承しようとする淵明の記述姿勢は、彼の古人に抱く尊崇の念が表現的營みとして顯れたものと理解出來るのである。

四

以上のように「群輔錄」は引用文ばかりで構成されており、その資料的價値については充分に認められようが、文學的興趣は希薄といわざるを得ない。それでは何故に淵明はこのようなものを纏めたのであろうか。第一章でも示した通り、方宗誠は「集錄之以示諸子、識故實、廣見聞」と述べて、「群輔錄」は子供達の知識・見聞を廣げるのを目的とすると說明していた。方宗誠の見解は、淵明自らも內省しつつ、子の儼らに向けて訓戒を述べた「與子儼等疏（子の儼等に與うる疏）」（巻八）を踏まえることで、より明確化することが出來る。その冒頭では次のように述べられている。

告儼・俟・份・佚・佟。天地賦命、生必有死。自古賢聖、誰能獨免。子夏有言曰、「死生有命、富貴在天。」四友之人、親受音旨。發斯談者、將非窮達不可妄求、壽夭永無外請故耶（儼・俟・份・佚・佟に告ぐ。天地命を賦し、生に必ず死有り。古より賢聖、誰か能く獨り免れん。子夏に言有りて曰く、「死生に命有り、富貴は天に在り」と。四友の人、親しく音旨を受く。斯の談を發する者、將た窮達は妄りに求むべからず、壽夭は永く外に請うこと無き故に非ずや）。

ここにおいて、淵明が敬慕しながら取り上げる子夏、あるいは孔子の「四友」は、「群輔錄」にも次のように擧げられている。

㉘德行：顏淵 閔子騫 冉伯牛 仲弓　言語：宰我 子貢　政事：冉有 季路　文學：子游 子夏

右四科。見『論語』（右四科。『論語』に見ゆ）。

㉙顏回 子貢 子路 子張

右孔子四友。……。子曰、「吾有四友焉。自吾得回、門人益親、是非胥附乎。……。」見『孔叢子』（右孔子の四友。……。子曰く、「吾に四友有り。吾の回を得てより、門人益ます親なり、是れ胥附に非ずや。……」と。『孔叢子』に見ゆ）。

また同疏には「但恨隣靡二仲、室無萊婦。抱茲苦心、良獨內愧（但だ恨むらくは隣に二仲靡し、室に萊婦無きを。茲の苦心を抱き、良に獨り內に愧ずるのみ）」ともあり、淵明は後漢の蔣詡、字は元卿に自己を比擬しつつ、彼のごとくに求仲と羊仲のような友人を得られなかった寂し

さを述べているが、「二仲」についても「群輔錄」に次のようにみられる。

㊶求仲 羊仲

右二人不知何許人、……、蔣元卿之去兖州、還杜陵、荊棘塞門。舍中有三逕、不出、唯二人從之游。時人謂之二仲。見嵇康『高士傳』（右の二人 何許の人なるかを知らず、……、蔣元卿の兖州を去りて、杜陵に還り、荊棘もて門を塞ぐ。舍中に三逕有りて、出でずして、唯だ二人のみ之に從いて游ぶ。時人 之を二仲と謂う。嵇康『高士傳』に見ゆ）。

加えていえば、淵明が子供達に向けて訓戒を述べるのは、「群輔錄」の編纂に直接繋がっていくような價値觀に由來していると考えられる。改めて、第一章に擧げた「群輔錄」の跋文を想起されたい。淵明は漢代に稱贊された「田叔・孟舒等十人」や「兩客」らの名が史書で失われ、姓名が隱れてしまった理由を、彼らの「操行之難」にあるものと捉えていた。それは、淵明の品行方正の重視が窺われるものと理解され、「操行」の二字もまた同疏において次のようにみえる。

濟北泛稚春、晉時操行人也。七世同財、家人無怨色。『詩』曰、「高山仰止、景行行止。」雖不能爾、至心尚之。汝其愼哉。吾復何言（濟北の泛稚春、晉時の操行の人なり。七世財を同じくするも、家人に怨色無し。『詩』に曰く、「高山は仰がれ、景行は行わる」と。爾る能わずと雖も、至心之を尚べ。汝其れ愼めよ。吾 復た何をか言わん）。

泛稚春を「操行」正しき人物として稱えており、七代にわたって財産を共有して、家族は「怨色」なく暮らしたという。

このようにみていくと方宗誠が指摘するように、淵明は子供達の知識・見聞を廣げることを目的として、さらにいえば、子供達に向けて古人に學んで、必ずや「操行」を保ち續けて生きよ、と願いを込めて、「群輔錄」を編纂した可能性は充分にあるものといえる。だが、淵明に「群輔錄」を纏めさせたのは、それのみであろうか。淵明は「贈羊長史（羊長史に贈る）」（卷二）において次のようにうたっている。

愚生三季後　愚 三季の後に生まれ
02慨然念黃虞　慨然として黃虞を念う
得知千載外　千載の外を知るを得るは
04正賴古人書　正に古人の書に賴るのみ
賢聖留餘跡　賢聖 餘跡を留め
06事事在中都　事事 中都に在り
豈忘游心目　豈に心目を游ばすを忘れんや
08關河不可踰　關河 踰ゆべからず
九域甫已一　九域 甫めて已に一となり
10逝將理舟輿　逝くゆく將に舟輿に理めんとす
聞君當先邁　君 當に先に邁くべしと聞くも
12負痾不獲俱　痾を負いて俱にするを獲ず

夏・殷・周の後に生まれ落ち、慨然として黃帝や虞舜の時代に思いを馳せる。謙讓の一人稱である「愚」を用いているのは、そうした古の時代に多大な敬意を拂ってのことであるだろう。第三句以下では、千載に隔たる時代の背景を知るには古人の書物に賴るほかない。「賢聖」の名殘を留める長安へ向けて「心目」を遊ばせているが、實際には關所や河を越え得ないとうたっている。淵明はさらに續ける。

路若經商山　路 若し商山を經なば
14爲我少躊躇　我が爲に少しく躊躇せよ
多謝綺與角　多謝す 綺と角と
16精爽今何如　精爽 今何如

紫芝誰復採　紫芝 誰か復た採る
18深谷久應蕪　深谷 久しく應に蕪るるなるべし
駟馬無貫患　駟馬 患を貫ること無し
20貧賤有交娛　貧賤 娛しみに交うる有り
清謠結心曲　清謠 心曲に結ぶ
22人乖運見踈　人乖きて運踈んぜらる
擁懷累代下　懷いを擁す 累代の下
24言盡意不舒　言盡きて意舒びず

道すがら商山を經たならば、綺里季と角里先生に挨拶して欲しいと、また第十七句以下は諸家が指摘するように四皓の歌を踏まえており、四皓、及び彼らの歌は皇甫謐『高士傳』卷中に次のようにみえる。

四皓者、皆河内軹人也、或在汲。……、而作歌曰、「莫莫高山、深谷逶迤。曄曄紫芝、可以療飢。唐虞世遠、吾將何歸。駟馬高蓋、其憂甚大。富貴之畏人、不如貧賤之肆志」（四皓は、皆 河内軹の人なり、或いは汲に在り。……、而して歌を作りて曰く、「莫莫たる高山、深谷 逶迤たり。曄曄たる紫芝、以て飢えを療すべし。唐虞の世遠く、吾將た何くにか歸らん。駟馬 高蓋、其の憂い甚だ大なり。富貴の人を畏れしむるは、貧賤の志を肆（ほしいまま）にするにしかず」と）。

淵明はこれを踏まえて第十七句から十八句で、「紫芝」で飢えをしのぐものも居なくなり、商山の「深谷」の荒れ果てた様を想起する。第十九句から二十句においては、四皓と同様に「駟馬」を飼う豪勢な暮らしの盡きぬ憂い、「貧賤」な暮らしにこそ、樂しみが得られるものと共感的に表現している。ここから淵明の四皓の精神を繼ぐ意志がみて取れる。末聯では、四皓と遙かに隔たった時代を生きるなかで、彼らへの思いは充分には述べ盡くせないと結んでいる。そして、四皓については「群輔錄」においても次のようにみえる。

㉞園公［注：姓園名秉……。見『陳留志』］綺里季 夏黄公［注：姓崔名廓……。見『崔氏譜』］角里先生

右商山四皓。當秦之末、俱隱上洛商山。皇甫士安云、「竝河内軹人。」見『漢書』及皇甫謐『高士傳』（右商山の四皓。秦の末に當たり、俱に上洛の商山に隱る。皇甫士安云う、「竝びに河内軹の人なり」と。『漢書』及び皇甫謐『高士傳』に見ゆ）。

淵明は『漢書』や『高士傳』、さらには『陳留志』や『崔氏譜』といった様々な書物に四皓の姿を追い求め、それを記し留めようとしている。

改めていえば、淵明が「群輔錄」において書物を渉獵し、地道に古人を記し連ねていった原動力は、確かに子供達の存在が大きかったのであろう。だが、より重要なのは子供達にどうか古人に學んで欲しいと願う根底に、淵明自身の古人に對する限りない尊崇の念、古の世界への果てない憧憬の念があったに違いないことである。ここに、淵明が「群輔錄」編纂のために書物と向き合い、「群輔錄」を通じて古人を傳承しようとした根本的な志向がある。淵明は古の繼承者として古人を後世に繋いでいくために、また淵明自身の抱える古を生き得ない歎きを越えゆくために、「群輔錄」の編纂營爲を通じて書物に棲む古の住人達を蒐集し、彼らを網羅的に自己に刻み込んでいくことで、書物に廣がる古の世界を、自己の内面世界に再構築していったのである。

おわりに

本稿は、陶淵明の「集聖賢群輔錄」について、讀書札記と捉える先學の見解に注目し、淵明の讀書の根本的なところから捉え直した。淵

明は、政界に馴染めず、貧しい暮らしを營む中で、讀書を樂しみ、學問的研鑽に勵んでいた。淵明は讀書を通じて自己の貫くべき生き方を、より豐かな生を獲得していったものといえる。「群輔錄」では、淵明が愛讀していた樣々な書物をみることが出來、淵明の書物を入念に讀み込む態度、加えて、古人を正しく傳承しようする記述姿勢が窺われた。こうした淵明の「群輔錄」編纂の根底には、淵明の古人への尊崇の念、古の世界への憧憬の念が底流していたのである。

ところで、より廣い觀點から淵明と古人ないしは古の世界との關係をみるならば、注意すべき作品として、「詠二疏」、「詠荊軻」、「詠三良」[22]、また「詠貧士」七首などの詠史詩、さらにまた「擬古」九首などがある。淵明に內面化された古人、あるいは古人の生、そして、古の世界は、こうした作品においては如何に表現され、如何なる特色が窺えるのであろうか。こうした點を今後の課題として附記し、稿を結ぶこととしたい。

注

（1）底本には汲古閣舊藏の『陶淵明集』（中華再造善本、二〇〇三年）を用いた。陽休之「陶潛集序錄」などの引用に當たっても該書に據る。また必要に應じて、李公煥『箋注陶淵明集』、陶澍『靖節先生集』などを參照した。

（2）梁啓超は『陶集考證』において、「陽休之所謂「八卷無序」者也。此本殆於五卷外加入「五孝傳」一卷、「四八目」上下二卷、共爲八卷。故休之據此而言五卷本之「闕少」也（陽休之の所謂る「八卷にして序無」き者なり。此の本は殆ど五卷の外に「五孝傳」一卷、「四八目」上下二卷を加入して、共に八卷と爲す」（『飲冰室合集』第二二册、中華書局、一九三六年、四九頁）と述べている。併せて郭紹虞『陶集考辯』（『照隅室古典文學論集』上卷、上海古籍出版社、一九八三年）などを參照されたい。

（3）潘重規氏は「聖賢群輔錄新箋」において、「群輔錄」の「本名」は「四八目」と述べ、「集聖賢群輔錄」の名は宋代以降の文獻に頻出することを指摘しており（『新亞書院學術年刊』第七期、一九六五年、三〇九頁）、楊勇氏『陶淵明集校箋』（上海古籍出版社、二〇〇七年）、袁行霈氏『陶淵明集箋注』（中華書局、二〇〇三年）なども潘重規氏の說を支持している。

（4）陶集に關わる僞作說は、淸朝に敷かれた言論統制の影響を多分に受けていようこと、潘重規氏前揭「聖賢群輔錄新箋」、三〇五～三三五頁、石川忠久氏「史家としての陶淵明」（初出は『櫻美林大學中國文學論叢』第一號、一九六八年。後に『陶淵明とその時代』研文出版、一九九四年に所收。本稿では後者を用いた。）、一一二～一二四頁、拙稿「陶集僞作說小考」（『筑波中國文化論叢』三五號、二〇一六年）、一～三一頁參照。

（5）浙江本『四庫全書總目提要』（中華書局、一九六五年）、一一五一～一一五二頁參照。

（6）①②③の訓讀については煩雜さを避けて、改行せずに以下に示すこととした。なお、「（九）州選擧」は、底本では「九」字を缺くが、淸・趙在翰輯『七緯』（鍾肇鵬・蕭文郁點校、中華書局、二〇一二年、七七七頁）などに據って補った。

①明由は升級を曉（あき）らかにす［注：宋均曰く、級は、等差なり。政の先後する所なり。］必育は稅役を受（さず）く［注：宋均曰く、賦稅及び徭役を受け、宜しく施爲すべき所なり。］成博は古諸を受く［注：宋均曰く、古の諸侯の職等なり。］隕丘は［注：一に立に作る］延嬉を受く［注：宋均曰く、延は、長なり。嬉は、興なり。主に此の錄を受くなり。］

右燧人の四佐。燧人は出天し、四佐は出洛す［注：宋均曰く、出天は、天の生ずる所なり。出洛は、地の生ずる所なり。］。②……右伏羲の六佐。六佐は出世す［注：宋均曰く、宓戲は燧人に及ばず、故に二佐を増す。出世は、人の生ずる所なり。］。③……右黄帝の七輔。［九］州に選擧せられて、帝德を翼佐す。燧人の四佐より七輔に至るまで、『論語摘輔象』に見ゆ。

（7）『論語摘輔象』は『隋書』經籍志に著錄されないが、同書の經部・讖緯之書類に「孝經內事一卷」とあり、その注に殘された梁代の書誌情報に「論語讖八卷宋均注」とみえ、本書もまたそのうちに含まれていたものとされる（安居香山・中村璋八氏『緯書の基礎的研究』國書刊行會、一九八六年所收の中村璋八氏「論語緯（讖）」參照）。

（8）ただし、楊勇氏は前掲『陶淵明集校箋』において「宋庠「私記」曰、「『五孝傳』已下至『四八目』、子注詳密、廣於他集。」則李本中注文、其爲原來有之者乎。或云此爲自注、不知何據）（宋庠「私記」に曰く、「『五孝傳』より已下の『四八目』に至っては、子注詳密にして、他集よりも廣し」と。則ち李本中の注文、其れ原來より之有る者と爲すか。或いは此れ自注爲りと云うも、何れに據るかを知らず）」（三二五頁）と述べるように、宋・宋庠はおそらくは淵明自注の立場を採っており、楊勇氏はそれに疑義を呈している。なお、注で引用されるのは、『論語摘輔象』の宋均のほか、王粲の賦や王敦の言、また曹叡「甄表狀」、『北海耆舊傳』、『後漢書』、『崔氏譜』、『陳留志』である。諸本の編纂時期などについて、『北海耆舊傳』は『隋書』經籍志、史部・雜傳類の「四海耆舊傳一卷」に當たるものとされており（姚振宗『隋書經籍志考證』卷二十參照）、編者は不明であるが、「耆舊傳」などの人物傳が後漢から東晉期に流行したものであることは、永田拓治氏「『汝南先賢傳』の編纂について」（『立命館文學』六一九號、二〇一二年、三五二～三六七頁）參照。『後漢書』は本文については先學が指摘するように謝承『後漢書』が有力であり、たとえば、⑭に「太尉掾汝南細陽范滂字孟博」とあり、范曄『後漢書』黨錮傳では「范滂字孟博、汝南征羌人也」と異同をみることが出來、ここに附された李賢注に謝承『後漢書』を引いて「汝南細陽人也」とあるのと一致する。注の『後漢書』は、⑬「八顧［注：『後漢書』無劉儒、有范滂、有翟超」、⑮「八厨［注：『後漢書』無劉翊、有劉儒」とあり、「八顧」に「范滂」を、「八及」に「翟超」を、「八厨」に「劉儒」を擧げるのは、范曄『後漢書』と一致し、謝承『後漢書』は確認し得ない。しかし范曄『後漢書』の參照二本もまた謝承のそれであるから、范曄『後漢書』に基づく後世の注釋とは斷じ得ない。また『陳留志』は『隋書』經籍志、史部・雜傳類に「陳留志十五卷東晉剡令江敞撰」と著錄されており、『崔氏譜』は『隋書』經籍志に未收であるが、裴松之が『吳書』諸葛亮傳の注に一例ばかり引用している。潘重規氏は前掲「聖賢群輔錄新箋」においてこうした注の諸本も含め、「陶公讀書採穫之作……無一非晉以前人書（陶公の讀書の採穫の作……一として晉以前の人の書に非ざる無し）」（三一一頁）と述べている。

（9）「八儒」は『韓非子』顯學篇に「子張」「子思」「顏氏」「孟氏」「漆雕氏」「仲良氏」「孫氏」「樂正氏」とみられ、「群輔錄」の跋文の後にも「八儒」及び「三墨」の記述がみられるが、この二條は宋・宋庠が「此似後人妄加、陶公非本意（此れ後人の妄加するところに似たり、陶公の本意に非ず）」と述べて以來、僞作と看做すのが定說である。

（10）「夫操行之難」は、底本では「失操行之難（操行を失するの難あり）」に作っているようであるが、李公煥本などの諸版、袁行霈氏前掲『陶淵明集箋注』（五九五頁）などの校訂に從う。

（11）「田叔・孟舒等十人」などについては、淵明自身も彼らの姓名が不明

瞭であるのを慨歎している以上、彼らを敬慕していたことは明らかである。ここに淵明の一側面として、しばしば説かれる熾烈な氣性の一端が窺われる。

(12) 方宗誠『陶詩眞銓』。引用は『中華大典――魏晉南北朝文學分典』（鳳凰出版社、二〇〇七年）、一〇〇七頁に據る。

(13) 潘重規氏前掲「聖賢群輔錄新箋」、三一二頁參照。なお、石川忠久氏は前掲「史家としての陶淵明」において「五孝傳」と「群輔錄」を「史傳類」（一一二頁）に位置づけており、こうした觀點については併せて齊益壽氏『黃菊東籬耀古今――陶淵明其人其詩散論――』の第三章「陶淵明的儒者襟抱與獨立精神」（國立臺灣大學出版、二〇一六年）を參照。ただ、「群輔錄」はその「四八目」、あるいは「集聖賢群輔錄」という稱からも窺えるように目錄的であり、史書や人物傳を企圖するものとは捉え難いように思われる。

(14) 李善は「琴書」に注して、劉歆「遂初賦」の「玩琴書以滌暢（琴書を玩びて以て滌暢す）」（『文選』卷四十五）を擧げている。

(15) 併せて一海知義氏「陶淵明の孔子批判」（初出は『文學』四五號、岩波書店、一九七七年。後に『一海知義著作集』第二册、藤原書店、二〇〇八年に所收）を參照されたい。

(16) 明・楊愼『丹鉛雜錄』卷一の「讀書不求甚解」などを參照。

(17) 川合康三氏「かくありたい我れ――「五柳先生傳」型自傳」（『中國の自傳文學』、創文社、一九九六年）、八二頁參照。

(18) 資料の分類については、基本的には『隋書』經籍志に從うこととし、併せて姚振宗『後漢書藝文志』、潘重規氏前掲「聖賢群輔錄新箋」などを參照しながら、時代順に竝べることとした。

(19) ㊹は底本では、「見『漢書』及『決錄』」とあるが、潘重規氏前掲「聖賢群輔錄新箋」（三二五頁）、楊勇氏前掲『陶淵明集校箋』（三四九頁）などに據って、「『後漢書』」の誤りと判斷した。

(20) 「**鉉**」字と「鯀」字は『廣韻』を參照し、異體字の關係にあるものと判斷した。

(21) 顏師古は『漢書』古今人表の「秦不虛」に「雒陶已下皆舜之友也。……。竝見『尸子』（雒陶より已下 皆舜の友なり。……。竝びに『尸子』に見ゆ）」と注している。なお、「群輔錄」の⑪が「雄陶」に作り、『尸子』や『漢書』が「雒陶」に作るのは魯魚亥豕の異同で、おそらくは「雒」字に作るのが正しい。王念孫は『讀書雜志』志七、「墨子雜志」卷一の「王孫雒」の條で「隸書雄字或作雒、與雒相似、故雒譌爲雄（隸書の雄字 或いは雒に作る、雒と相い似たり、故に雒もて譌りて雄と爲す）」と說明している。

(22) 「詠二疏」詩などについては、拙稿「陶淵明詠史詩試論――詠史詩における「傳體」とその特色――」（『筑波中國文化論叢』三四號、二〇一五年）、一～三八頁を參照。